

沖縄文化協会 2025 年度公開研究発表会

第 3 回「沖縄文化協会外間守善賞」授賞式

日 時：2025 年 6 月 21 日（土）・22 日（日）【21 日 13:00～19:30、22 日 10:00～17:00】

場 所：沖縄県立芸術大学 一般教育棟 3 階 大講義室（沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4）

参加費：500 円（資料代）

※第 3 回「沖縄文化協会外間守善賞」受賞者研究発表および授賞式は 6 月 21 日 16 時 10 分より行います。

全体スケジュール 総合司会〈山田 浩世〉

第 1 日（6 月 21 日）

13:00～13:10 開会の辞 鈴木耕太（沖縄文化協会 2025 年度公開研究発表会実行委員長）

13:10～16:00 研究発表 午後の部

16:10～16:55 第 3 回「沖縄文化協会外間守善賞」受賞者による研究発表

17:00～17:20 第 3 回「沖縄文化協会外間守善賞」授賞式

17:30～19:30 受賞祝賀会および懇親会 場所：沖縄県立芸術大学 学生食堂

会費 一般:2500 円、一般発表者:1500 円、学生:1000 円 司会〈三島 わかな〉

第 2 日（6 月 22 日）

10:00～12:15 研究発表 午前の部

12:15～13:30 休憩（昼食）

13:30～16:55 研究発表 午後の部

16:55～17:00 閉会の辞 仲原 穰（沖縄文化協会会長）

【研究発表 6 月 21 日 午後の部】

司会

13:10～13:40 玉城 弘（浦添市文化協会沖縄語部会）

〈西岡 敏〉

・何故、琉球語（沖縄語）を日本国の方言と呼ぶのか

13:45～14:15 具志 隆平（琉球大学大学院地域共創研究科）

〈山田 浩世〉

・近世初中期琉球における宗教政策と神社

14:20～14:50 中野 夢（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

〈山田 浩世〉

・近世琉球の婚姻儀礼にみる朝衣色彩の表象

——久米村士族の婚姻儀礼における朝衣変遷を中心に——

14:55～15:25 新田 和馬（沖縄大学地域研究所特別研究員）

〈麻生 伸一〉

・近世琉球における硫黄生産の実態

15:30～16:00 濱地 龍磨（沖縄県教育庁文化財課）

〈麻生 伸一〉

・琉球国末期における御後絵の取り扱いに関する一考察

【研究発表 6月22日 午前の部】

10:00～10:30 大竹 有子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員） 〈鈴木 耕太〉

- ・ 日常着および観光用貸衣装の事例を通じてみた琉装の現在
——リバイバルとしての日常琉装、観光地での活用を事例として——

10:35～11:05 齋木 喜美子（関西学院大学） 〈照屋 理〉

- ・ 戦後八重山における台湾文化資本の影響と連続性
——喜友名(石島)英文を手がかりに——

11:10～11:40 高江洲 義英（おもろさうし保存会会長） 〈照屋 理〉

- ・ 「おもろさうし」の歌唱法と「ふし名」の関係（その2）
——伊平屋のおもろと「あおりやへふし」——

11:45～12:15 大西 達貴（東京外国語大学大学院博士後期課程） 〈田場 由美雄〉

- ・ 多文化共創イノベーションリーダー育成プログラム(MIRAI)
・ 戦後沖縄における写真家たちの協働的実践の流れとその意義
——沖縄写真部門や写真集団「ざこ」、写真広場「あーまん」などを手がかりに——

【研究発表 6月22日 午後の部】

13:30～14:00 中村 春菜（琉球大学人文社会学部） 〈前田 勇樹〉

- ・ チャイナ部隊員が見た戦後初期の沖縄
——「沖縄島游草」を手掛かりに——

14:05～14:35 波照間 永子（明治大学）・花城 洋子（比較舞踊学会） 〈我部 大和〉

- ・ 阿波連本啓作《郷土のわらべ唄》と「表現舞踊」
——船越節子のオーラル・ヒストリーから——

14:40～15:10 大城 ナミ（沖縄文化協会会員） 〈我部 大和〉

- ・ たゆたいのなかで立ち上がる身体
——琉球舞踊にみる型と世界の関係——

15:15～15:45 三島 わかな（沖縄県立芸術大学） 〈久万田 晋〉

- ・ 洋楽ロジックを乗り越える〈うた〉の現在
——沖縄ラップを対象に——

15:50～16:20 源 園生（國學院大学大学院特別研究生） 〈久万田 晋〉

- ・ 与論島のシニグ御願詞(ユングトゥ)の変遷

16:25～16:55 藤原美樹（國學院大学文学研究科博士後期課程） 〈照屋 理〉

- ・ 石垣島川平の神ニランタフヤン
——神迎え・神送り儀礼からの考察——

【沖縄文化協会 2025 年度公開研究発表会実行委員会】

〒903-0815 沖縄県那覇市首里金城町3-6 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

鈴木耕太研究室内：Tel 098-882-5043 E-mail：okinawabunka.opua@gmail.com

実行委員長：鈴木耕太 副実行委員長：山田浩世

【沖縄文化協会】 Tel&Fax 098-887-2652（担当：前野涼子）

何故、琉球語（沖縄語）を日本国の方言と呼ぶのか

玉城 弘（浦添市文化協会沖縄語部会）

【はじめに】

本稿の研究テーマは本要旨後段にかかげる琉球語の「語源」6点についてである。

筆者はこれまで同テーマについての先行研究の論考に出合ったことがない。そして多くの三母音的琉球語の「語源」を解明してきた。結果として、琉球語は五母音的日本語に属せず、又日本語の方言には該当しないことを用例を示し証明してきた。これからより多くの研鑽を積み、文部省学校教育法による琉球語を学ぶ権利を勝ち取ることである。

昭和38年、国立国語研究所所長岩淵悦太郎は沖縄語辞典刊行に当り、「沖縄のことは日本語に属し、日本語の方言とみるべきである」と記している。

そういう説を主張するのであれば、日本本土の人達は沖縄のことは（琉球語）をどれほど理解し、又話ができるだろうか、筆者が知る限り、一部研究者を除いて、ほとんどの本土の人は話せないのが実状である。にもかかわらず、日本政府は沖縄のことは日本語に属し、日本語の方言と見るべきであるとして、文部省学校教育法による学習を認めていない。それを認知させるにはより多くの三母音的琉球語を発掘し、日本語との違い、独立した言語（琉球語）であることを証明することであると考えます。

琉球語は日本古語から分岐したんだとの仮説のままで幾百年余がすぎて未だ証明されていない。仮説のままである。筆者は浦添の王陵「ゆうどうり」の語源から「エキサー」、「北谷、読谷山、谷茶」、「糸満、糸数」、「波平（ハンジャ）」、「潮平（スンジャ）」、「伊江島」、「伊是名」、「伊平屋」、「今帰仁（ナチジン）」、「伊地（イチ）」、「伊計島（いちはなり）」、「いいるきさん（言遣通一さん）」、「ちいゑえー大君、きこゑ大きみ、聞得大君」他多くの琉球語の語源、用例を示し、日本語との違いを証明してきた。

その結果見えてきたのは、三母音的琉球語は、中国、朝鮮国、日本国その他東南アジア諸国の言葉（音）の融合によって形成されてきたと推測される。最近探し当てた3用例を示す。日本語で「丁度（choodo）」と発音するが中国語読みでは「ちんとう（chintu）」で琉球語読みも同じである。又「常」は日本語読みは「つね・じょう」であるが中国語読みでは「ちゃあ（chaa）」で琉球語読みも同じで、用例としては「常頑丈（chaa-ganjyuu）、常毎日（chaa - meenichi）」がある。

本稿では今帰仁村の「古宇利島」、「神アサギ」「アサギぐあ」の語源他、ウチナーンチュは自然界、宇宙の動きをよく観察し、生活の中に取り入れてきた。その中から「にぬふあぶし（北極星）」の語源と、日本語で「北」のことを琉球語では何故「にし（子精）」と呼ぶのか、又「あまみきよしねりきよ」の語源等解明し琉球語の形成について考えてみたい。

【おわりに】

三母音的琉球語の成立がいつか、確かなことはまだ、分からないが筆者がこれまで例示してきたほとんどの固有名詞が日本語（古語）からの分岐したのではない事を用例を示して証明してきた。

本稿は今帰仁村「古宇利島」「神アサギ」「アサギぐあ」「にぬふあぶし」「にし」「あまみきよしねりきよ」等の新たな語源を考察し、私説を補則する。

近世初中期琉球における宗教政策と神社

具志 隆平（琉球大学大学院地域共創研究科）

【先行研究及び研究の背景】

琉球史において、近世初期は、薩摩侵攻をきっかけに国家体制を再編した近世体制への移行期と位置付けることができる。再編は、宗教も例外ではなかった。これまでの先行研究では、向象賢・蔡温によって整理、祭政分離が進められ、新たな王権儀礼の創出がされたとしている。一方で、これまで仏教・神女・為政者の視点から近世琉球の宗教政策が語られ、宗教政策における神社は着目されてこなかった。

近年、新垣氏や波上宮によって琉球神社史研究の成果がまとめられた。しかし、これらの研究では、神社史にとどまり、政治との関連は検討不足である。また、社寺関係についての言及は、別当寺の宗派改宗のみであり、宗教行政における神社の位置づけを探るには不十分である。加えて、神職と身分制に論及するも、年代が不明確のため、身分制との関連を詳細にしておらず、課題がある。

【目的】

本研究は、薩摩侵攻～蔡温三司官辞任(1609～1752)までの宗教政策の再検討を行い、①近世初中期の宗教政策における神社の変遷、②近世初期における寺社関係、③身分制と神職について検討することを目的としたい。

【研究方法】

①では、『球陽』中における薩摩侵攻から蔡温までの宗教政策を再検討した上で、宗教政策における神社の変遷を言及する。②では、別当寺の改宗以外にも真言僧が神社に関わっている例が『琉球国由来記』に見られるので、事例を整理し、寺社関係の考察の一助とする。③では、「万書書付」（琉球資料一四六）に身分制における神職の立場が明記されているが、先行研究では年代が不明確なまま利用されてきた。年代を特定し、身分社会における神職の位置づけを再検討する。

【結論】

①では、近世期における神社は、国王の御参詣や社参の創出、神職の身分向上が見られ、古琉球期と比較し、官社・官職の様な国家的組織の性格を強めた。一方で、近世期に強化された先王祭祀においては、神社が宗教者としての独自の立場を確立し得なかった。②では、計7社に真言僧が関与しており、官社・私社や島嶼間を超えた広域な関与が確認できた。③は、おおよそ年代が特定できた。士族の職業規制緩和の契機とされてきた1725年以前であり、かつ「無系之者より里も¹」任職されてきたため、身分制における神職が他職と比較し、特殊な位置であったことを明らかにした。

【参考文献】

- 新垣裕之 2021 『琉球の神社史 資料で読み解く神道の流れ』琉球歴史伝承研究所
後多田敦 2009 『琉球の国家祭祀制度 その変容と崩壊』 出版舎 Mugen
知名定寛 2008 『琉球仏教史の研究』 榕樹書林
波上宮 2015 『坡名城波上宮誌 通史編』

¹ 560頁、（『那覇市史資料篇第Ⅰ巻 11 琉球資料(下)』那覇市企画部文化振興課、2001年）

【21日 14:20～14:50】

近世琉球の婚姻儀礼にみる朝衣色彩の表象 ——久米村士族の婚姻儀礼における朝衣変遷を中心に——

中野 夢（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

【先行研究及び研究の背景】

婚姻儀礼研究については、渡口政興（1928）の「那覇の婚姻風俗」が基礎的研究として知られる。首里士族に関しては、漢那敬子ら（2011）が「嘉味田家文書」から儀礼内容を明らかにしている。久米村士族については、劉書鈺による『唐榮林氏婚姻家礼』（1860）を分析した儒教思想の研究がある。しかし、婚礼儀礼における朝衣の表象分析は比較的手薄である。

近世琉球社会では、家譜編纂事業の進展に伴い階層的な身分制度が導入され、特に士族階層において宗族意識や家系継承への保守的態度が強化された。羽地仕置および御教条といった統治規範の確立とともに婚姻規定が整備され、家系存続を左右する婚姻儀礼は重要な社会制度として機能するようになった。このような社会背景に伴い、婚礼衣装も身分表象の対象として管理されるようになった。

【研究目的と方法】

本研究は、近世の婚礼行列において使用される朝衣の色彩に注目し、その象徴的意味と社会的機能を明らかにすることを目的とする。研究方法として『四本堂家礼』（1736年）と『家徳堂規模帳』（1864年）を比較分析し、久米村士族の婚礼における朝衣の色彩使用の変化および、那覇士族・首里士族との比較を通じ身分表象との関連性についても分析を行う。

【結論】

『四本堂家礼』の婚礼行列記録では、花嫁や先導役が「黒朝衣」を着用し、大僮・小僮は「白朝衣」を着用していた。約100年後の『家徳堂規模帳』では、従者の衣装が「白朝衣」から「藍衣」へと変化する。士族の婚姻儀礼には「婦家帰の行列」があり、この際花嫁は下裳を「黒」から「白」に変え、被りを「黒朝」から「白朝」に変更する。これは「親の家を出た者は死んでいる」という観念を象徴するものである。嫁側の付き添いが「白朝衣」を着用するのは、婚礼を子どもの「死」と捉え、葬礼同様に喪服で参列したためと推測される。琉球の婚姻儀礼では、慶事において弔事や神事を示す「白朝衣」が用いられるという特徴的な儀礼形態が見られた。この慣習は後に規制により、王子・按司階級の高級士族のみに継承される特権となった。

【参考資料】

1. 「家譜からみた門中-2-久米村における婚姻と養取慣行」『琉球大学法文学部紀要（社会学篇）琉球大学法文学部編(23)』、1980年
2. 田里修「近世琉球における婚姻規制について」『沖縄大学紀要(8)』、1991年
3. 渡口政興「那覇の婚姻風俗」『南島研究 第三輯』1928年
4. 漢那敬子ほか「<史料紹介>「嘉味田家文書」より婚礼関係史料一解題および翻刻」『史料編集室紀要』沖縄県教育委員会、2011年
5. 劉書鈺「近世後期久米村士族の婚礼と儒教思想『唐榮林氏婚姻家礼』を中心に」『琉球沖縄歴史』琉球沖縄歴史学会編(5)、2023年
6. 那覇市企画部市史編集室『那覇市史資料篇第2巻中の7_那覇の民俗』1979年
7. 名桜大学『琉球文学体系』編集刊行委員会『琉球民俗関係資料4』株式会社ゆまに書房、2023年

【21日 14:55～15:25】

近世琉球における硫黄生産の実態

新田 和馬（沖縄大学地域研究所特別研究員）

【先行研究及び研究目的】

硫黄島および硫黄に関する研究は、桂博史氏や鴨澤巖氏、豊見山和行氏、深澤秋人氏、毛屹峰氏、山内晋次氏らの研究、さらに『鳥島郷友七嶽会誌』や『宜野湾市史』等の市町村史が挙げられる。特に桂氏と深澤氏の研究は、琉球内部における硫黄の生産過程を解明することに寄与しているが、泊村で硫黄が製錬されていた常時の状況を解明するには至っていない。そこで、本報告では、泊村・硫黄島間における硫黄の採掘・運搬・製錬等を明らかにしたい。

【研究の背景】

琉球は約 500 年にわたって中国（明・清）と宗藩関係を維持し、馬や海蝶殻など、様々な品物を同国へ献上した。そのなかでも、硫黄は明代・清代を通じて中国へ献上され続けた代表的な進貢品といえる。

中国へ献上される硫黄は、琉球唯一の火山島である硫黄島で採掘された。その歴史は古く、『明実録』によれば、三山（山北・中山・山南）が硫黄を明へ献上している。また『海東諸国紀』所収の「琉球国之図」には、硫黄島が描かれ、琉球が硫黄を採掘していたことが記されている。

【研究方法】

本報告では「琉球産業制度史料」や『球陽』、家譜等の諸史料を駆使し、泊村・硫黄島間における硫黄の採掘・運搬・製錬等を明らかにしたい。

【結論】

煎熟硫黄（製錬済の硫黄）の生産は、王府の定めた規定や手法に基づき組織的に行われた。そこには、士・百姓といった身分を超えて協同する泊村・硫黄島の人々の姿があった。彼らの生産した硫黄は、薬品や火薬として用いられていたとみられる。

琉球の国家体制を支えた硫黄は、泊村・硫黄島の人々の労苦によって生み出されていた。

【参考文献】

- ・桂博史「琉球国鳥島硫黄鉱山の研究 資料と旧島民の証言による鉱山通史（前篇）」『日本鉱業史研究』No.67、九州大学総合研究博物館内日本鉱業史研究会、2014 年
- ・桂博史「琉球国鳥島硫黄鉱山の研究 資料と旧島民の証言による鉱山通史（後篇）」『日本鉱業史研究』No.68、九州大学総合研究博物館内日本鉱業史研究会、2015 年
- ・宜野湾市史編集委員会編『宜野湾市史 第四巻 資料編三』宜野湾市、1985 年
- ・豊見山和行「琉球王国時代における硫黄島の諸相」『沖縄県史 資料編 13 硫黄島』沖縄県教育委員会、2002 年
- ・鳥島郷友七嶽会誌編集委員会編『鳥島郷友七嶽会誌』鳥島郷友七嶽会、2008 年
- ・深澤秋人「近世琉球における朝貢品硫黄の精製と集積－1840～50 年代を中心に」『第十屆中琉歴史関係学術会議論文集』中琉文化経済協会、2007 年
- ・毛屹峰「清代琉球王国の進貢貿易について－進貢品の分析を中心に－」沖縄大学大学院 2021 年度修士論文
- ・山内晋次「日宋・日元貿易期における「南島路」と硫黄交易」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 233 集〔共同研究〕中世日本の国際交流における海上交通に関する研究、人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、2021 年

琉球国末期における御後絵の取り扱いに関する一考察

濱地 龍磨（沖縄県教育庁文化財課）

【先行研究】

御後絵は、琉球において国王あるいは王統において重要な役割を果たした王世子の肖像画として作成されたことが知られる。

戦前より美術史の観点から、鎌倉芳太郎や比嘉朝健による調査研究が行われたほか、比嘉朝健によって肖像画を描いたとされる絵師たちの家譜が紹介されるなど、いわゆる琉球絵画の象徴的研究対象として取り扱われてきた。近年では、平川信幸の研究成果によって、その歴史的背景や図像解釈が大幅に進捗したほか、昨年3月に米国から4点の御後絵が返還されたことにより社会的注目が顕著になっている。

【研究の背景及び研究目的】

しかしながら、従来の研究は戦前の研究者によって筆写された文献資料や撮影写真が主たる分析対象となっており、その作成過程や修理に関する行政処理方針については未解明の部分が多く、史料学の側面から研究分析の余地が残るものであった。

昨年3月の御後絵4点の返還後、県教育委員会では関連する史料の情報収集を進めていたところ、本年3月那覇市歴史博物館より令和6年度に修理を実施していた尚家文書中に御後絵に関連する記録が含まれている旨の連絡があり、当職が点検したところ総番号440号「道光貳拾年より里咸豊元迄 僉議」（以下総番号440号と表記）、総番号456号「要 先侯様御性行を覗クヘキ資料廻文」、総番号464号「訴訟 五冊」（以下総番号456号と表記）に琉球国末期における御後絵の製作・修理に関する記録が確認された。

【研究方法】

総番号440号の記録には、尚濬中城王子（第18代国王尚育王の長男）の御後絵製作に関する僉議が確認され、当該僉議の内容から、同時代的に御後絵と呼ぶ肖像画の対象が従来の研究における認識とは異なることが明らかになった。

また、総番号464号の記録には、王国末期の円覚寺御照堂内において、第18代尚育王御後絵の表具修理および尚哲（第15代国王尚温の父）御後絵の表具修理が行われている記述が確認され、従来の研究においては明らかとなっていなかった書替以外の修理について、その実施場所が明らかになったとともに、円覚寺御照堂が御後絵の奉安機能だけではなく、修理施設としての一面を有していたことが判明した。

さらに、総番号464号において確認された尚育王御後絵の表具修理記録を鎌倉芳太郎撮影写真等と合わせてみた場合、昨年返還された尚育王御後絵に着けられている表具は当該修理において付け替えられた物である可能性が指摘できる。

【結論】

これらの記録は、従来判然としていなかった王府行政内における御後絵の取り扱いの一端を明らかにするものである。

日常着および観光用貸衣装の事例を通じてみた琉装の現在 ——リバイバルとしての日常琉装、観光地での活用を事例として——

大竹 有子（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

【目的】

琉装とは、一般的には王府時代に成立した沖縄の衣生活を指す。現在の沖縄において琉装と呼ばれる衣装は、当然ながら王府時代とも近代のものとも異なっており、刻々と変化し続けている。その中から〈現代の琉装〉（後述）の最近の動き、および観光の場における琉装、という2つの事例を紹介・分析し、沖縄文化の一側面として持つ意味を考察したい。

【先行研究】

発表者は近代から現代の日常着としての琉装について『沖縄芸術の科学』第33号（2021年）に研究ノートとしてまとめた。また、日常生活からは消滅するかに見えた琉装を現代的な日常着〈現代の琉装〉としてリバイバルする動きについては、民族芸術学会 2024 大会において報告した。

【研究の背景】

上記を踏まえて、2024年1月に行われたイベント「第一回ドゥジンフェスティバル」を〈現代の琉装〉における特筆すべき事例として現状を報告する。

また、〈現代の琉装〉より以前から存在し、沖縄県民にとってより目にすることが多い琉装のジャンルとして、観光の場におけるレンタルの琉装がある。これらは観光＝非日常を演出する小道具であり、写真映えが要求される。そのため着心地や時代考証は考慮されない場合が多く、いわば派手なだけで不正確な琉装とみなされることが多い。

【研究方法】

「第一回ドゥジンフェスティバル」は〈現代の琉装〉の中心的アイテムである「カジュアル・ドゥジン」そのもの、またそれに合う小間物を合わせて展示販売することで〈現代の琉装〉の普及を促進する内容であった。注目すべきは、物品のみならず琉球芸能や沖縄以外の文化（フラ）も合わせて紹介することで、衣に限らず生活文化全体の一部として〈現代の琉装〉を位置付けることを提案した点である。同時に、日常着としての琉装のリバイバルに賛同する人々が「伝統的」沖縄文化や、手仕事、健康に良い丁寧な暮らしに着目する人々と重複することが観察された。

一方レンタル琉装については、用いられる衣装や着付け、業者や利用者の意図などについては、詳細な調査・分析の結果はみられない。近年では従来型のレンタル衣装に加え、手仕事の染織による衣装レンタルや、王府時代に近い色彩や色柄を選び、着装した上で文化や歴史を体験するプログラムを提供するなど、従来の写真映りのみを追求した琉装とは異なる意図のサービスも考案されはじめています。

発表者は何通りかの衣装を体験して主宰者にインタビューすることで、一端ではあるが現在のレンタル琉装の実情を調査した。その結果、主催者の手法・ポリシー、体験者のニーズは多彩であり、結果として琉装のイメージにも影響していることが観察された。

【結論】

〈現代の琉装〉と近年のレンタル琉装の多様化は、一見すると別々の動きのように感じられる。しかし〈現代の琉装〉が始動しはじめた2010年代から、琉装を沖縄の衣文化として、さらには沖縄文化の重要な一部として再認識しようという動きがみられるのは共通している。沖縄県内あるいは大多数のウチナーンチュへの普及はまだ道半ばであるが、沖縄学の揺籃期やウチナーグチの復権などに続く、文化のアイデンティティを回復する動きの一例として観察することができよう。

戦後八重山における台湾文化資本の影響と連続性

——喜友名(石島)英文を手がかりに——

齋木 喜美子 (関西学院大学)

【研究の背景】

戦後初期、無政府状況下で治安が著しく悪化していた八重山では、郷里の状況を憂えた若者たちを中心になって自治会を立ち上げた。この八重山自治会の組織化に尽力したのが、喜友名(石島)英文(1919年ー1992年)であった。英文は米軍統治後も引き続き八重山支庁衛生部で活動し、『八重山文化』(1946年7月)、『若い人』(1949年4月)を創刊して詩やエッセイを同雑誌に執筆するなど、「八重山文芸復興」期の文化活動にも大きな足跡を残した。しかし台湾での詩作活動との連続性については必ずしも明らかではない。

【先行研究】

英文は市庁退職後も詩作と作曲に励み、生涯に12冊の著作(ほとんどが自費出版)を著した。また英文の履歴、特に八重山の離島教師、詩人としてのライフヒストリーと作品については、英文自身の著書や八重山高校時代の教え子・三木健氏による詳細な先行研究がある。それによると英文の文芸活動は、「作詞や作曲に抒情詩(曲)、童謡、生活詩、団体歌」などのいくつかの傾向(ジャンル)が見られること、「作曲の多くが教育実践や社会活動などと一体となっている」こと、「作曲が自学独創」によっていることなどが特徴として指摘されている¹。また英文は台湾時代を自ら「芸術童謡」の活動期と名づけ²、『潮がれ浜』(1958年)以降の著作にも代表作として頻繁に再掲している。

【研究目的・方法】

しかしこれまでの著作や先行研究では、台湾時代の童謡詩に関する英文の記述は乏しく、改稿した詩についても言及がない。そこで本発表では、英文の『台湾日日新報』掲載作品を紹介するとともに戦後の作品との異同、台湾時代の経験の影響について報告する。

【結論】

台湾での5年間の文芸活動は英文がはじめて故郷を離れて詩作に向き合った時代であった。現時点で明らかになっている台湾時代の発表媒体と作品から、台湾での創作活動が戦後の英文の詩作の礎となって現在に引き継がれていたことは明らかである。また1953年頃、英文は総合雑誌『地殻』の発行も目指していたといわれる。発刊は叶わなかったが、その精神的影響は田頭政三郎・高嶺方祐・仲本正輝らによる八重山高校の同人誌『気根』などに影響を与えた³。今後も台湾時代の資料発掘を進めるとともに、英文の戦後における創作と実践との関わり、教え子たちに引き継がれた文化・教育実践についても明らかにしていきたい。

¹ 三木健『八重山の民衆詩人・石島英文』八重山音楽協会、2012年、7頁。

² 石島英文「自序」『へちまの花』1985年より

³ 石島英文『ある離島教師の白書』潮の会、1979年、215頁。

【22日 11:10~11:40】

「おもろさうし」の歌唱法と「ふし名」の関係（その2）

——伊平屋のおもろと「あおりやへふし」——

高江洲 義英（おもろさうし保存会会長）

【先行研究】

「おもろさうし」は沖縄最古の神歌集として、多くの論述が今日まで重ねられているが、その多くはおもろ本文もしくはふし名によるものであった。

演者は約60年前から、山内盛彬先生の指導により、「おもろさうし」や「のろのおもり」などを歌い続けてきた。その中で「ふし名（曲）」と「おもろ本文（歌詞）」の関係を考察し、「ふし名」は曲であり、その「おもろ」は歌詞となり、同曲異詞として歌うことができることを前回の研究発表会で報告した。

【研究の背景】

昭和46年には、「琉球王朝の禮樂」と題して、「王府のおもろ」を山内盛彬先生の主取（ぬしど）で「あおりやへかふし」と「しよりゑとふし」の2曲を歌い、「のろのおもり」から、「恩納のろのおもり」も歌った。その後に山内盛彬先生がブラジルより帰沖した際は、共に恩納村の「のろ殿内」を訪ねて歌唱し、さらにNHKの取材による「使命ありて」の番組では先生と一緒に王府おもろの歌唱もした。

【目的】

昨年の本会では、王府のおもろ巻22の1の「あおりやへかふし」と巻1の1とが同曲異詞となっており、巻22の1の曲で巻1の1を歌唱して初めて公開した。

今回は、この技法を「地方おもろ」に適応し、第17巻の「恩納おもろより上のおもろ御さうし」の中から伊平屋、伊是名のおもろを王府おもろの巻22の1や巻1の1と比較してみる。

【方法】

巻17の中では、1207首より1217首までは伊平屋、伊是名のおもろとなっており、1214首から1216首までは同曲異詞の「あおりやへふし」となっている。第1巻「きこゑ大きみかおもろ・首里王府のろ御さうし」の中の第1首から第9首までも「あおりやへかふし」による同曲異詞であり、極めて重要な節であったと思われるが、1214首のあおりやへふしの「又」では「伊平屋、の親のろよ、押笠に、知られい、やへり庭、雲子、積で、みおやせ」の歌詞となっているので、これを同ふし（同曲）で歌ってみる。

【結論】

こうしてみると、おもろさうしにある「ふし名」を曲としていくつかの「おもろ」を歌詞として当てはめることができ、今後さらに多くのおもろを歌うことができると思われる。

【参考文献】

1. 山内盛彬：琉球王朝秘曲の研究，民俗芸能全集刊行会，1964.
2. 山内盛彬：「琉球王朝の禮樂」公演冊子，日本都市センター，1971.
3. 仲原善忠，外間守善：校本おもろさうし，角川書店，1965
4. 池宮正治：おもろさうしふし名索引，南西印刷出版部（ひるぎ社），1979.
5. 高江洲義英：「おもろさうし」の歌唱法と「ふし名」の関係—第1巻第1首「あおりやへかふし」—沖縄文化協会2024年度公開研究発表会，抄録集

戦後沖縄における写真家たちの協働的実践の流れとその意義

——沖展写真部門や写真集団「ごこ」、写真広場「あーまん」などを手がかりに——

大西 達貴（東京外国語大学大学院博士後期課程・多文化共創イノベーションリーダー育成プログラム(MIRAI)）

【先行研究】

沖縄写真界における協働事例に関する研究については、仲里効らによる山田實など写真家への取材成果（文献②）などが挙げられる。加えて、写真家による組織が発行する媒体（文献①）なども重要な資料となる。

【研究の背景】

戦前から旅券写真などを扱っていた沖縄の写真業界は、沖縄戦により灰燼に帰した後、1950年代頃より建設写真や身分証の需要に応じて復興していく。同時に業界では自発的な表現も模索されるようになり、52年には水島源晃らにより「沖縄写真倶楽部」が結成され、56年の第7回沖展以降、写真部門の審査・運営などを牽引していく。当初の主題は琉装の女性など、のちの広告写真へと接続していくものであった。加えて59年に山田實らによって設立された「沖縄ニコールクラブ」のように街中に出て人々の生活を撮る潮流も存在した。復帰を前にした60年代に入ると米軍占領下の社会状況を写真によって告発すべく、72年に伊志嶺隆と琉球大学などの写真部学生らによる写真集団「ごこ」が結成され、沖展写真部門の権威性に対し、会場前での抗議や対抗展示などを行った。76年には東松照明が平良孝七と沖縄における初の自主ギャラリー「あーまん」を立ち上げると、ここに琉大写真部出身の比嘉豊光が参加して運営を担っていく。81年には沖展に続く新たな作品発表の場として県の芸術祭に写真部を創設するために平良孝七と比嘉康雄を中心に沖縄県写真協会が結成された。さらに75年海洋博前後期の沖縄の写真家たちは、広告・商業写真分野においても協働していく。76年には沖縄県商業写真家協会が発足し、広告写真に関する報酬や料金の規定が進められた。その後85年の平敷兼七・嘉納辰彦による写真同人誌『美風』の創刊や比嘉康雄・比嘉豊光らによる96年の「映像と話の会」、97年の「琉球弧を記録する会」の結成など、戦後の沖縄写真界は復帰を経つつ記録・展示・出版とそれぞれの領域において協働し、自立した表現を模索し続けてきた。

【目的】

本発表では戦後沖縄における写真表現に関する組織の展開を、各組織の資料や関係者の回顧録などを手がかりに、写真メディアと戦後沖縄社会の連関について紐解くことを目指す。

【方法】

本発表では写真集団の展開の流れという観点から、沖縄の写真家たちの協働を振り返る。対象は沖展写真部門など公性の高いものから「あーまん」など写真家による自主性の高いものまでを含める。

【結論】

戦後沖縄の写真家たちは写真というメディアの持つ社会性に着目し、報道・記録・美術などの表現領域と合わせて、写真業界という面においても協働を試みていた。共通する軸として写真による沖縄社会への貢献という目的があった。

【主要文献】

①沖縄県写真協会（1992）『沖縄県写真協会 20 周年記念誌 おきなわ写真の歩み』

②仲里効・丑番直子・平田利恵子（2006）『山田實クロニクルー沖縄と写真と私』

※本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2185 の支援を受けたものである。

【22日 13:30～14:00】

チャイナ部隊員が見た戦後初期の沖縄 ——「沖縄島游草」を手掛かりに——

中村 春菜（琉球大学人文社会学部）

発表では、戦後初期の沖縄の様相を、チャイナ部隊員が創作した漢詩を手がかりに報告する。チャイナ部隊とは、1947～1949年にかけて米軍占領下の沖縄島の一部地域において、一時的に駐在していた中華民国の政府派遣組織を指す。彼らは主に米軍が太平洋諸島や沖縄島に運び込んだ米軍余剰物資を収集し、中国本国へ送る業務に従事していた。

【先行研究】

先行研究では以下の点が明らかになっている。すなわち①中華民国が沖縄へ物資を収集しに来た背景、②中華民国とアメリカの間で締結された米軍余剰物資売買契約の詳細、③チャイナ部隊の構成人数は約1,000名であったこと④地元住民との私的な交流は禁じられていたが、一部には交流や雇用関係が存在していたことなどである

¹。

【研究の背景・目的】

近年、「上海中央日報」に「雪抱」という人物が「沖縄島游草」というタイトルで寄稿した漢詩文が発見された²。游草とは、旅先で見聞きした出来事を詩文として綴る形式の漢詩である。この漢詩が発表された時期や詠まれた場所、内容から判断して、「雪抱」は「チャイナ部隊員」であると考えてよい。「沖縄島游草」は、チャイナ部隊の本部が置かれていた現・うるま市具志川の自然や風物、駐屯地の首里で出会った老婆の様子や慰問演舞会、糸満市米須の「自殺崖」の光景、女学生との淡い思い出、泡盛と思しき強い酒についての描写などがあり、内容は多岐にわたっている。作者の教養の高さがうかがえるほか、彼が戦後沖縄をどのようにまなざし、住民と交流していたのかが垣間見える。また、詩に詠まれた内容と呼応するような沖縄住民側の証言も存在している。

【研究方法】

これまでのチャイナ部隊研究では主に証言、新聞記事、地域史誌、行政文書を用いて検証が進められてきたが、本発表ではそれに加漢詩という文学的資料の読解を通して、多角的にアプローチする「マルチ・アーカイヴァル手法」を試みる。

【結論】

戦後復興へと向かう沖縄の姿を、外国人の視点から詠んだ漢詩に関する研究は管見の限り見当たらない。本発表では、「沖縄島游草」を上里賢一と平良妙子が定義した琉球漢詩と近代沖縄漢詩という枠組みの延長線上に位置づけ、その意義を考察する³。

¹ チャイナ部隊研究については、以下の報告書に詳しい。高橋順子「2018～2023年度 JSPS 科研費基盤研究 (C) 研究成果報告書 占領初期沖縄における「チャイナ部隊」と米・中関係」日本女子大学人間社会学部、2024年。

² 1948年4月17日および同年12月8日付。

³ 琉球漢詩と近代沖縄漢詩の定義については以下の論考に詳しい。上里賢一「琉球漢詩の舞台概観」『トランスナショナルな文化伝播—東アジア文化交流の学際的研究—』（琉球中国国際関係学会誌、2015年）、平良妙子「近代沖縄漢詩研究への展望」『東北大学中国語学文学論集』東北大学中国文学研究室、2021年。

阿波連本啓作《郷土のわらべ唄》と「表現舞踊」

——船越節子のオーラル・ヒストリーから——

波照間 永子（明治大学）・花城 洋子（比較舞踊学会）

【先行研究・背景・目的】

沖縄戦直後、各地で芸能による復興の機運が醸成されていた。首里では豊平良顕、与那覇政牛、西平守模、阿波連本啓、渡名喜聡を中心に首里藝能文化連盟が発足し、舞踊、組踊、新劇を上演した（矢野 1988:214 他）。本啓は同連盟設立の礎となった首里市文化庁で子守唄やわらべ唄を取り上げ演出し子供たちに指導した。また、これらの創作舞踊を「表現舞踊」と称し、本作に携わった時期を創作活動の最盛期と位置づけた（阿波連 1996）。しかしその実態は明らかにされていない。本研究は本啓作《郷土のわらべ唄》創出の経緯と作品の内容を調査し、本啓が追求した「表現舞踊」とは何かを考察する。

【研究方法】

首里市文化庁・首里藝能文化連盟に関する資料、本啓の著作や公演パンフレット、新聞記事に基づき、創作の経緯を探るとともに、本啓の高弟、船越節子氏（県指定無形文化財「沖縄伝統舞踊」保持者・啓船本流船乃会家元）を対象に《郷土のわらべ唄》の曲名・振付等、当時の様子を聞き取りした。また子守唄やわらべ唄に振付した舞踊的遊戯および子供が出演した舞踊作品の上演状況を分析し《郷土のわらべ唄》の位置づけを試みた。

【結論】

- 1) 1946 年、首里市文化庁が設置され散財した文化財の収集を開始、後に芸能の研究実践にも着手した。翌年、首里藝能文化連盟が発足、2~3 年で自然消滅に至るが、本啓は指導を継続し、身内を失った人や子供に希望を与えるため《郷土のわらべ唄》を演目に加え発表会で披露するほか米軍施設、病院、療養所、孤児院、教会、刑務所で慰問活動を行った。
- 2) 節子が教えを受けた曲は「あかな」「ヨーテー」「大村御殿」等 20 曲余りで、数曲を組み合わせて構成された。赤子を背負った年長者と「背守り」（魔除け）をつけた年少者が歌いながら踊る。また古典舞踊や雑踊りにも見られる手振り、雑踊りの足使いや洋舞的ステップが、発達段階に応じて振付けられている。これらは戦後に展開する子供の舞踊（子供舞踊・児童舞踊）の嚆矢となった。
- 3) 本啓は「表現舞踊」を「見たまを写實的に表現する舞踊」（阿波連 1980:309）と定義した。この語には本啓が神奈川県川崎在住時に師事した日本のモダンダンスの先駆者、石井漠の影響が窺える（阿波連 1980:310）。漠の著書と本啓の初作《海の幸》の創作経緯から、表現舞踊《郷土のわらべ唄》は、生き生きと歌い踊る子供たちの姿を顕現し、人々に生きる希望を与えんとする作者の内なる志を象徴的に表した作品といえる（石井 1927:4・18）。

【参考文献】

阿波連本啓（1980）「私の戦後史」『私の戦後史』第2集、沖縄タイムス社：283-348

阿波連本啓（1996）「ごあいさつ」『阿波連本啓藝歴（師匠歴）七十五周年記念公演「築城」～創作の舞い～』6月22日、那覇市民会館大ホール

石井漠（1927）『舞踊の本質と其創作法』人文會出版

矢野輝雄（1988）『沖縄舞踊の歴史』築地書館

【22日 14:40～15:10】

たゆたいのなかで立ち上がる身体 ——琉球舞踊にみる型と世界の関係——

大城 ナミ（沖縄文化協会会員）

【先行研究及び研究の背景】

身体と知覚、あるいは動きと意味の関係を探る身体論的研究は、20世紀以降、哲学（メルロ＝ポンティ）や舞踊学（ラバン）を中心に展開されてきた。一方、琉球舞踊においては「型」の重要性が語られる一方で、それを超えてあらわれる微細な動きや感覚の質に関する理論的考察は少ない。本研究では、そうした領域に新たな光を当てる。

【研究目的】

本発表は、琉球舞踊における「たゆたい」と呼ばれる現象を、単なる感性的余韻ではなく、身体が世界との関係の中で“にじみ出てくる”運動としてとらえなおすことを目的とする。哲学的視点としてメルロ＝ポンティの「私は身体である」という主張、また東洋思想における「心身一如」の考えを取り入れ、舞踊における身体感覚の生成的な構造を論じる。

【研究方法と事例】

分析対象は、琉球舞踊における代表的な女踊りの所作。「歩行」「揺れ」「沈み込み」「漂い」といった具体的動作の中に、重力、空間、呼吸、他者との関係に応答して現れる「たゆたい」の質を読み取る。

【結論】

たゆたいとは、身体の内側から意図的に生み出されるものではなく、世界との関係性のなかでふいに現れる詩的な運動である。それはまさに、型と生成、心と体、私と世界の交点に生じる“現れ”であり、「私は身体である」という理解に重なるものである。

【参考文献】

- ・モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967年
- ・ルドルフ・ラバン『身体運動の習得』神沢和夫訳、白水社、1990年第4刷発行
- ・湯浅泰雄『身体論－東洋的心身論と現代』、講談社、1996年第10刷発行
- ・金子明友『わざの伝承』明和出版、2003年再版発行
- ・大城ナミ「琉球舞踊の女踊りにおける型－運動譜による分析の試み－」2009年

洋楽ロジックを乗り越える〈うた〉の現在

——沖縄ラップを対象に——

三島 わかな（沖縄県立芸術大学）

【研究の背景】

日本における洋楽受容は、明治政府の政策として始まり一世紀半が過ぎた。洋楽演奏の普及と定着はむろん、洋楽理論に基づく邦人作品も蓄積をみた。戦後にはジャズやロックそしてJ-POPでも洋楽理論をベースに多様な楽曲が創作されてきた。さらに1980年代にはヒップホップも受容され、日本語ラップの誕生に象徴される独自の展開をみた。1973年に誕生したヒップホップは、当時、ギャングの抗争が絶えなかったニューヨークのブロンクスで暴力廃絶を訴える文化運動だった。その四大要素は、DJ、ブレイクダンス、ラップ、グラフィティ・アートであり、「ラップ」はヒップホップ特有の歌唱法である。その書法を大別すると、①歌詞がうたわれない書法（言語リズム重視）、②歌詞をメロディにのせてうたう書法（flow）があり、多くの楽曲では①と②が共存する。①と②の共通点は「ハーモニーを放棄した」点にある。

いまやラップは世界の音楽シーンを席卷し、その水脈のひとつに沖縄出身ラッパーたちの活動がある。

【先行研究】

日本語ラップの開拓者・Mummy-Dは、日本語ラップの様式変遷を第1世代～第6世代に区分する¹。第6世代（2010年代後半以降）の楽曲では、「ラップという歌唱方法を自分のアートフォームの武器」にすると指摘する²。一方、同時期のJ-POP界の沖縄出身アーティストの楽曲においても、沖縄的要素ならびに文化的背景の異なる複数の要素が、ひとつの楽曲内でパッチワーク的に扱われる傾向にある³。つまり、ラップとJ-POPの「ジャンル間の接近」が2010年代後半以降の特色であると同時に、創作手法の傾向として複数の文化的要素が本来の文脈から断絶して楽曲を形づくる点にあるだろう。ここでいう「文化的背景の異なる複数の要素」のひとつに「ラップ」の手法も含まれる。

【研究目的と方法】

そこで本発表では、沖縄出身の4人のラッパー⁴のサイファー（cipher：リレー歌唱）による楽曲《螺旋-琉球- Rasen in Okinawa》（2023）を対象に、リリックの構造（音韻面、拍節面）と楽曲構造をすり合わせつつ分析する。そこから、前掲の先行研究の指摘を検証しつつ、洋楽要素の限定用法の意義を検討する。

【結論】

結論として《螺旋-琉球》は、楽曲をかたちづくる諸要素（多言語、韻律、アクセント、ビート、旋律）が多文化的傾向を示すとともに、それらの諸要素は対等な関係にある。もはや、洋楽理論（和声、拍子）のロジックに縛られず、洋楽至上主義の価値観から解放された状態にあるのだ。

¹ 川原繁人『言語学的ラップ』東京書籍 2023：190-191。

² Ibid.：211。

³ 三島わかな（編著）『メディアのなかの沖縄イメージ～文化創造の100年』七月社 2025年4月。

⁴ Awich、唾奇、OZworld、CHICO CARLITOのラッパーによる。

与論島のシニグ^{ユングトゥ}御願詞の変遷

源 園生（國學院大學大学院特別研究生）

【先行研究】

- ① 栄喜久元『与論島の民俗』1964 自家出版：与論島のシニグの最古グループに属するとされている「キンサアクラ」のユングトゥを考察する。
- ② 与論町誌編集委員会・執筆者山田実「シニグ祭」『与論町誌』1988 与論町教育委員会：1969年に小野重朗氏とともに調査した際の「ニッチェーサアクラ」および「ハニクサアクラ」のユングトゥが記録されており、近年との比較資料として重要である。
- ③ 平敷令治編『与論島のシニグ』1995 沖縄国際大学：同日同時間に一斉に行われるシニグを学生たちが分担して調査記録した重要文献であり、ユングトゥの記録もある。
- ④ 与論町誌編集委員会・拙筆「シニグ祭りの記録」『与論町誌追録版』2018 与論町教育委員会：2015年に65歳の父から29歳の長子へ座元の継承が行われた。方言を話さない世代であり、東京都の神社に7年半奉職した神職であり、文化の過渡期ともいえよう。

【研究の背景】

与論島のシニグは、祭祀集団「サアクラ」ごとの「神道(カミミチ)」と「斎舎(サアクラ)」と「構成員」を辿れば、無人島であった与論島の島建てがわかるとされ、祭りで座元が奏上するユングトゥには、「シニグの神性」や「サアクラの来歴」が詠われているとみられる。かつては島民の半数以上が参加していたが、現在は5%に満たず、衰退の一途にある。

【研究目的】

かつては時を定めて訪れる神に、座元がその場で自らの胸の内に湧き上がる「ユングトゥ」を謹んで奏上するものであったと考えられるが、1960年代には、奉書を以ってなされるサアクラが確認できる。また、当時は稲作を中心とする農耕儀礼であったことから、牛や家畜の生育が詠われていたものが、現在は消滅しつつある。その変遷を考察する。

【研究方法】

与論島の「シニグ」が初めて調査された1957（昭和32）年から60年以上を経て、祭りの「ユングトゥ（御願詞）」がどのように変化し、受容されているかについて、先行研究および近年の参与観察から、変遷を考察していく。

【結論】

「ユングトゥ」は、座元がその場で自らの胸の内に湧き上がる「ことば」を奏上するものであったと考えられる。近年は奉書を以って奏上されるケースと、昔ながらのかたちがある。祭りの構成に大きな差は見られないが、「ユングトゥ」はサアクラにより若干の差がある。シニグの由来を語る古様とともに、新たな神観念や、現在の生活形態に即して氏子の胸の内の代弁として奏上される傾向や、全てが共通語で奏上されているサアクラもある。

【22日 16:25～16:55】

石垣島川平の神ニランタフヤン ——神迎え・神送り儀礼からの考察——

藤原美樹（國學院大學文学研究科博士後期課程）

【研究の背景】

石垣島の川平は節祭に出現するマユンガナシで有名であるが、それだけではなく、農耕儀礼に基づく年中祭祀が今でも年に26回行われている。現在川平村で稲作を行うのは二世帯のみで、殆どの住民は農耕と関係のない生活を送っているが、それでもツカサなど神人組織を中心として共同体の中で祭祀が伝承・継続されている。生活の中に生きる信仰の形を研究するため、2023年より年に数回訪問して調査を行っている。

【研究の目的】

本研究では、川平村におけるニランタフヤンの信仰について考察する。川平村の信仰は、御嶽の神、マユンガナシ、ニランタフヤンなど、さまざまな神観念が混在し重層的な様相を示している。その中で、これまであまり多く取り上げられることのなかったニランタフヤンに注目し、神迎え・神送り儀礼からその祭祀の構造を明らかにすることを目的とする。

【研究の方法】

川平の人々は、ニランタフヤンを「物づくりの神」と言う。農作物の神であり、旧暦一月の「ヤーラ願い」、あるいは旧暦二月の「二月たかび」で迎えられ、旧暦九月の節祭最終日における「神願い」で送られる。農作物の作付けを始める際に海の彼方から神を迎え、収穫が終わるとその年の豊作を感謝して海の彼方へ送り返す、大切な神事であるため調査できる範囲は限定的である。住民への聞き取りによってその意味をとらえることが困難になりつつある現在、発表者が2024年、2025年に実見した神迎え・神送り行事について報告する。

【結論】

ニランタフヤンは春の田植え時期に迎え、秋の収穫後に送り返す神である。海の彼方から時を定めて来訪する「まれびと」型のマユンガナシとは違い、本土の山の神・田の神に似た構造をもつ。男性中心のマユンガナシとは対照的に、神司と女性のみが関わる祭祀である。

【先行研究・参考文献】

儀礼の内容や歌謡、神口などを中心とした研究があるが、さまざまな説が並存している。主な先行研究は以下の通り。

澤井真代 『石垣島川平の宗教儀礼一人・ことば・神』 2012年

保坂達雄 「石垣島川平の神と信仰」『神と巫女の古代伝承論』 2003年

湧上元雄 「八重山川平村の村落構造と年中行事」『沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽』 2000年

山下欣一 「八重山諸島石垣島・川平のマユンガナシと説話群」『南島説話生成の研究—ユタ・英雄・祭儀—』 1998年

石垣博孝 「石垣島川平村の二月タカビ」『沖縄の宗教と民俗』 1988年

比嘉政夫 「八重山川平における御嶽をめぐる儀礼と祭祀組織」『沖縄の門中と村落祭祀』 1983年

住谷一彦、ヨーゼフ・クライナー 『南西諸島の神観念』 1977年

喜舎場永珣 「川平村の「マヤヌ神」に関する覚書」『八重山民俗誌』 1977年

沖縄文化協会 2025 年度東京公開研究発表会のお知らせ

沖縄文化協会会長 仲原 穰
2025 年度東京公開研究発表会実行委員長 上地 聡子

沖縄文化協会では、2025 年度の東京公開研究発表会を開催いたします。つきましては研究発表者を募りたいと存じます。会員の皆様で研究発表をご希望の方は、下記の要領でご応募くださいますようお願いいたします。

【2025 年度東京公開研究発表会】

日時：2025 年 9 月 27 日（土）9:00 ～ 17:00（予定）

場所：明海大学 浦安キャンパス 講義棟

（＊ 東京駅より京葉線快速で 16 分、新浦安駅より徒歩 10 分）

（＊ 会場教室は後日、本会ホームページや予稿集などでお知らせします）

研究発表：1 人 30 分（発表 20 分・質疑応答 10 分）

内容：沖縄の社会・文化に関する研究

申込要領：下記 HP 掲載の申込要領を必ず参照のうえ、下記 Google Form（URL もしくは QR コード）より、①氏名、②所属、③メールアドレス、④報告タイトル、⑤報告要旨（1000～1200 字）を提出してください。発表者は査読の上、決定いたします。

申込先：<https://forms.gle/bTHIvEH8iDm7kTd39>
申込締切：2025 年 7 月 15 日（火）



※申込にあたっては以下の要領をご確認ください。

・内容は未発表のものに限ります。

・報告要旨には基本的に、①先行研究、②研究の背景、③目的、④方法、⑤結論の5点を含めてください。

・ひとつの発表を複数名で行う「共同発表」は 1 グループ 3 名までとし、全員が会員とします。また、代表者を明示してください。

・複数の報告を共通テーマの下、連続して発表したい場合は、報告要旨に「報告 A と報告 B はテーマが共通しているため、同じセッションでの発表を希望します」などと付記してください。なお、希望のあった報告が全て採用されるとは限りません。

※発表者は決定後（7 月下旬）、本会ホームページ上に掲載いたします。

本会ホームページ <http://www.okinawabunka.org>

本会ホームページへはこちらの QR コードからもアクセスできます →



【沖縄文化協会 2025 年度東京公開研究発表会実行委員会事務局】

〒279-8550 千葉県浦安市明海 1 丁目 明海大学浦安キャンパス不動産学部
上地聡子研究室 / E-mail: jsos.tokyo@gmail.com

会場案内

研究発表 会場：沖縄県立芸術大学 一般教育棟 3 階 大講義室（当蔵キャンパス）
 祝賀会・懇親会 会場：沖縄県立芸術大学 福利厚生棟 地下 1 階 学生食堂



◆入会案内

- △ 沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。
- △ 本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。
- △ 所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代 2 冊分を含みます）。
- △ 会費は振替もしくは現金為替で、下記の所へお送りください。

〒903-0815

沖縄県那覇市首里金城町 3-6

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所

鈴木耕太研究室気付

『沖縄文化』編集所

電 話 0 9 8 (8 8 7) 2 6 5 2

振替口座 0 2 0 3 0 — 5 — 2 5 1 7 0

U R L <http://okinawabunka.c.ooco.jp/>

Memo